

2022

九月九日(金)

国語

諸注意

○ 解答用紙に組・出席番号・氏名を必ず書くこと。

○ 字は楷書で丁寧に書くこと。読めないものは採点できません。記号も同様です。

○ 「数字で答えなさい」の問題は算用数字で答えること。 ○ 4 × 四

○ 「漢字で書きなさい」の問題は漢字が間違っていれば不正解です。

○ 抜き出し問題は、漢字が間違っているも抜き出し箇所が正しければ正答とします。ただし、明らかに異なる漢字を書いている場合や、漢字間違いによって意味が変わってしまう場合は誤答とします。

○ 「○文字で抜き出さない」の問題は、「」や句読点(、)を「文字」に含みます。

(例) 最後の五字を抜き出さない。

握手をした ↓ × 手をした。 ↓ ○

(例) 文中から八字で探して書きなさい。

「いいと思う。」 ↓ これで八字とします。

○ 記述問題において、文脈が不適切なものや質問の答えになっていないもの、伝えたいことが不明確なものは減点・誤答の対象となります。

○ 最後まで諦めずに取り組むこと。

一、次の傍線部の漢字は読みを答え、ひらがなは漢字で答えなさい。楷書で書くこと。〔知識・各1点〕

- | | | | |
|----------------------|------------------------------|----------------------|---------------------|
| ①ボールが <u>弾む</u> 。 | ②一斉に <u>座る</u> 。 | ③峠の店で <u>休む</u> 。 | ④川の水が <u>澄む</u> 。 |
| ⑤ <u>迷子</u> を捜す。 | ⑥野菜の <u>茎</u> まで食べる。 | ⑦遠くに <u>疎開</u> する。 | ⑧資料を <u>添付</u> する。 |
| ⑨計画が <u>破綻</u> する。 | ⑩粉が <u>沈殿</u> する。 | ⑪虫とり <u>あみ</u> を使う。 | ⑫パンが <u>こげる</u> 。 |
| ⑬ <u>いつしゅん</u> で終わる。 | ⑭折 <u>りた</u> たむ。 | ⑮米を <u>しゆう</u> かくする。 | ⑯ <u>前の記録</u> をこえる。 |
| ⑰ <u>ひ</u> かげで休む。 | ⑱ <u>兄</u> のように <u>したう</u> 。 | ⑲心が <u>ゆらぐ</u> 。 | ⑳川を <u>飛びこ</u> える。 |

二、次の各問いに答えなさい。〔知識・各1点〕

1 次の文の傍線部の意味をあとのア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) それは、ありふれた例だ。

ア みんなあこがれる。 イ あまり見られない。

ウ よく見かける。 エ あふれそうになっている。

(2) はにかむような表情になる。

ア まじめにする。 イ 何か言いたそうにする。

ウ 恥ずかしそうにする。 エ おだやかな気持ちになる。

(3) 夏休みにちなむ行事。

ア 盛り上げる。 イ 数が多くなった。

ウ 関係のある。 エ 入りまじる。

(4) はやる気持ちをおさえて、話を聞いた。

ア 人気がある。 イ 決心する。

ウ 我慢する。 エ 心があせる。

(5) かなしい気分をかもしだす音楽を流す。

ア 勢いをなくす。 イ 作り出す。

ウ 思い出す。 エ まじつかせる。

(6) 彼はおもむろに口を開いた。

ア こわこわと。 イ いらいらと。

ウ ゆっくりと。 エ 面白そうに。

(7) 弟は、母親の顔色をうかがうようにしていた。

ア そとと観察する。 イ 期待して目を向ける。

ウ じつと見つめる。 エ 見て見ぬふりする。

(8) 君もきつと、その作品のとりこになるだろう。

ア なつかしくなる。 イ くだらないと感じる。

ウ 心を奪われる。 エ 取り消したくなる。

2 次の文は読点を打っていないため、複数の意味にとれてしまいます。【】の中の意味になるように読点を一つ打つ場合、正しいものをあとのア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 私は友達に借りた本を渡した。

【本を渡した相手が友達である。】

ア 私は、友達に借りた本を渡した。
イ 私は友達に、借りた本を渡した。
ウ 私は友達に借りた、本を渡した。
エ 私は友達に借りた本を、渡した。

(2) 僕は必死で逃げる犬を追った。

【「必死」になっているのは僕である。】

ア 僕は、必死で逃げる犬を追った。

イ 僕は必死で、逃げる犬を追った。

ウ 僕は必死で逃げる、犬を追った。

エ 僕は必死で逃げる犬を、追った。

3 次の語はいくつの音節からできているか。算用数字で答えなさい。

(1) 朝のりレー (2) 追浜中学校

4 次のように表記される音節をそれぞれ何というか。語群ア〜コから適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) パ・ピ・プ・ペ・ポ

(2) ン

(3) ツ(小さな「ツ」)

(4) ガ行、ザ行 など

(5) キヤ、ジュ、ミヨ など

(6) 「スーパ―」や「チーム」などの語に入る「ー」(のばす音)

ア 母音 イ 促音 ウ 濁音 エ 発音 オ 拗音

カ 長音 キ 撥音 ク 子音 ケ 節音 コ 半濁音

5 次の各文は、それぞれ「話し言葉」と「書き言葉」のどちらについての説明か。「話し言葉」の説明であればア、「書き言葉」の説明であればイと答えなさい。

(1) 状況に応じて内容を省略したり、その場で言い直すことができる。

(2) いつ、誰が読んだり聞いたりしても正確に内容が理解できるようにする必要がある。

(3) 「あのね」「えつと」などの表現が出てくることがある。

(4) 同じ音の言葉を区別する「と」ができないので、同音異義語に注意が必要である。

6 次の文章は、「話し言葉」における相手へのはたらきかけ方の説明です。空欄【A】【B】に当てはまる言葉をそれぞれカタカナで答えなさい。(各1点)

「このバス、美術館前に止まります」

「この文を事実として言うときは文末を下げて発音しますが、文末を上げて発音すると、相手への問いかけになります。この文末の上げ下げの口調を【A】といいます。

また、文の中の、ある部分を強く発音したり、高く発音したりすると、その言葉を強調して伝える意味合いが出てきます。例えば、「美術館前に」の部分を強く発音すると、「他ではなく美術館前」という意味合いが強くなります。このように、ある部分を強調して発音する【B】といいます。

三、次の各問いに答えなさい。「知識・各1点」

1 次の文章はいくつの文で構成されているか。算用数字で答えなさい。

動物の多くは、体重の約六〇〜七〇パーセントが水分であり、人間の場合は、その約五パーセントを失うと危険な状態になってしまう。けれども、私たちは毎日、汗や排せつや呼吸によって約二〇〇〇〜二五〇〇ミリリットルの水分を失っている。そのため、飲み物や食べ物で毎日水分を補っているわけである。

2 次の各文はいくつの文節に区切ることができるか。算用数字で答えなさい。

- (1) おいしいケーキを床に落とした。
- (2) 台所で佐々木先生が悲しそうに泣いている。

3 次の各文はいくつの単語に区切ることができるか。算用数字で答えなさい。

- (1) 今日もみんなで合唱の練習にのぞむ。
- (2) 夏休みにもしろい映画をたくさん観る。

4 次の各文の傍線部の文節および連文節は、語群ア〜コのどれに当たるか。それぞれ適切なものを

一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 雨が激しく降ったが午後には晴れた。
- (2) ああ、チャーハンが床にこぼれている。
- (3) 教室にはあなただけが残った。
- (4) 明日、図書館に本を返す。
- (5) 私の誕生日に妹が爪切りを買ってきた。
- (6) 小さな子供が公園の砂場で遊んでいる。
- (7) 彼の母親は有名な作家だ。
- (8) 愛と勇氣、それが私の友達だ。

ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語 エ 接続語 オ 独立語
カ 主部 キ 述部 ク 修飾部 ケ 接続部 コ 独立部

5 次の各文において、傍線部の修飾語が連体修飾語ならア、連用修飾語ならイと答えなさい。

- (1) 私はすぐに夏休みの宿題にとりかかった。
- (2) 隣の教室から大きな声が聞こえてきた。
- (3) 昔のなつかしい記憶が心に浮かんだ。

6 次の各文において、傍線部の二つの文節はどのような関係になっているか。語群ア〜オからそれぞれ適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 追中生は、身なりがきちんとしている。
- (2) 夜空に無数の星が輝く。
- (3) 佐々木先生は優しくて、かっこいい。
- (4) 赤い車にすごいスピードで、追い抜かれた。

(5) とりあえず 明日になったら やつて みる。

ア 主・述の関係

イ 修飾・被修飾の関係

ウ 接続の関係

エ 並立の関係

オ 補助の関係

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。「思判表」

そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

サーカスの、大テントの見上げるように高い所を、こちらのブランコからあちらのブランコへ、三回宙返りをしながらキキが飛ぶと、テントにぎっしりいっぱいのお客様は、いつも割れるような拍手をします。

「まるで、鳥みたいじゃないか。」

「いえ、どちらかというと、ひょうですね。」

「いや、お魚さ。あゆはちようどあんなふうには跳ねるよ。」

人々はみんな、キキの三回宙返りを見るために、そのサーカスにやってきました。どの町へ行っても、キキの評判を知っていて、だからそのサーカスは、いつでも大入り満員でした。

「なあ、キキ……。」

団長さんは、いつも言っておりました。

「おまえさんは、世界一のブランコ乗りさ。だつてどこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできないんだからね。」

「でも、団長さん。いつか、誰かがやりますよ。みんな、一生懸命、練習をしていますもの。そうしたら、私の人気は落ちてしまうでしょう。」

「心配しなくてもいい。誰にも三回宙返りなんてできやしないさ。それに、もし、誰かがやり始めたら、おまえさんは四回宙返りをしてみせればいいじゃないか。」

「四回宙返りを？ できませんよ。練習してみました。三回半がやつとなんです。本当に、鳥でもない限り四回宙返りなんて無理なんです。」

キキは、人々の評判の中で、いつも幸福でしたが、誰か他の人が三回宙返りを始めたらと、考えると、そのときだけ少し心配になるのです。

「そのときは、団長さんの言うとおりに、四回宙返りをしなければいけないのだろうか……。」

キキは、サーカスの休みの日、誰もいないテントの中で何度か練習をしてみました。でも、いつももう少しというところで、ブランコに届かずに落ちてしまうのです。練習のときには、落ちたときの用心に、下に綱が張ってありますが、本番のときには、それがありません。キキのお父さんも、空中ブランコのスターだったのですが、三回宙返りに失敗して落ち、それがもとで亡くなったのです。

「およしよ。」

練習を見に来たピエロの口が、キキに言いました。

「四回宙返りなんて無理さ。人間にできることじゃないよ。」

「でも、誰かが、三回宙返りを始めたら、私の人気は落ちてしまふよ。」

「いいじゃないか。人気なんて落ちたつて死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いつそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」

「人気が落ちるといふことは、きつと寂しいことだと思ふよ。お客さんに拍手してもらえないくらいなら、私は死んだほうがいい……。」

キキのいるサーカスが、ある港町のカーニバルにやってきた夜のことでした。

キキは、サーカスを終えて一人波止場を散歩しておりました。波止場の片隅に、痩せたおばあさんが一人座つて、シャボン玉を吹いております。

「こんばんは。」

「ああ、こんばんは。ブランコ乗りのキキだね。」

「そうです。今夜の三回宙返りは、見てくれましたか。」

「いいや、見なかったよ。」

「そうですか。惜しいことをしましたね。今夜は、特にうまくいったんです。飛びながら自分でもまるで鳥みたいだつて思えたくらいなんですからね。」

「みんなもそう言っていたよ……。」

おばあさんは、あいかわらずシャボン玉を吹きながら、遠くカーニバルのテントの建ち並ぶ辺りでついたり消えたりしている赤や青の電気を見ておりましたが、急にキキの方に振り向いて言いました。

「おまえさんは知っているかね？」

「何をです？」

「今夜、この先の町にかかっている金星サーカスのピビが、三回宙返りをやったよ。」

「本当ですか。」

「どうとう成功したのさ。みごとな三回宙返りだったそうだよ。」

「そうですか……。」

「その評判を書いた新聞が、今、定期船でこの町へ向かつて走っている。明日の朝にはこの町に着いて、みんなに配られる。おまえさんの三回宙返りの人気も、今夜限りさ……。」

「そうですね……。」

「そうだよ。明日の晩の、拍手は、今夜の拍手ほど大きくはないだろうね。」

「でもね、おばあさん。金星サーカスのピビがやったとしても、まだ世界には三回宙返りをやれる人は、二人しかいないんですよ。」

「今までは、おまえさん一人しかできなかったのさ。それが、ピビにもできるようになったんだからね。」

お客さんは、それじゃ練習さえすれば、誰にでもできるんじゃないかな、つて考え始めるよ。」

キキは黙ってぼんやりと海の方を見ました。しかしまもなく振り返ってほんのちよつとほほえんでみせると、そのままゆっくり歩き始めました。

「おやすみなさい。おばあさん。」

「お待ち。」

キキは立ち止まりました。

「おまえさんは、明日の晩四回宙返りをやるつもりだね。」

「ええそうです。」

「死ぬよ。」

「いいんです。死んでも。」

「おまえさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいという、ただそれだけのために死ぬのかね。」

「そうです。」

「いいよ。それほど考えてるんだったら、おまえさんに四回宙返りをやらせてあげよう。おいで……。」

おばあさんは、かたわらの小さなテントの中に入り、やがて、澄んだ青い水の入った小瓶を持って現れました。

「これを、やる前にお飲み。でも、いいかね。一度しかできないよ。一度やって世界中のどんなブランコ乗りも受けたことのない盛大な拍手をもらって……それで終わりさ。それでもいいなら、おやり。」

次の日、その港町では、金星サーカスのピピがついに三回宙返りに成功したという話題でもちきりでした。でも、午後になると、その町の中央広場のまん中に、大きな看板が現れました。

「今夜、キキは、四回宙返りをやります。」

町の人々は、一斉に口をつぐんでしまいました。そしてその看板を見たあと、ピピのことを口にする者は誰もいなくなりました。

夕食が終わると、ほとんど町中の人々がキキのサーカスのテントに集まってきました。

「おい、およしよ。死んでしまうよ。」

ピエロの口がテントの陰で出番を待っているキキに近づいてきてささやきます。

「練習でも、まだ一度も成功してないんだらう？」

陽気な団長さんまでが、心配そうにキキを止めようとします。

「だいじょうぶですよ。きつとうまくゆきます。心配しないでください。」

音楽が高らかに鳴って、キキは白鳥のようにとび出してゆきました。

テントの高い所にあるブランコまで、縄ばしごをするすると登ってゆくと、お客さんにはそれが、天に昇ってゆく白い魂のように見えました。ブランコの上で、キキは、お客さんを見下ろして、ゆつくり右手を上げながら心の中でつぶやきました。

「見ててください。四回宙返りは、この一回しかできないのです。」

ブランコが揺れるたびに、キキは、世界全体がゆつくり揺れているように思えました。薬を口の中に入れました。

「あのおばあさんも、このテントのどこかで見ているのかな……。」

キキは、ぼんやり考えました。

しかし、次の瞬間、キキは、大きくブランコを振って、真つ暗な天井の奥へ向かってとび出してしまいました。ひどくゆっくりと、大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。それがむちのようになつて、一回転します。また花が開くように手足が伸びて、抱き抱えるようにつぼんで……二回転。今度は水から跳び上がるお魚のように跳ねて……三回転。お客さんは、はっと息を飲みました。

しかしキキは、やっぱり緩やかに、ひょうのような手足を弾ませると、次のブランコまでたつぷり余裕を残して、四つめの宙返りをしておりました。

人々のどよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。人々はみんな思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と、肩をたたき合いました。

でもそのとき、誰も気づかなかつたのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。お客さんがみんな満足して帰つたあと、がらんとしたテントの中を、団長さんをはじめ、サーカス中の人々が必死になつて捜し回つたのですが、無駄でした。

翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まつていて、それが悲しそうに鳴きながら、海の方へと飛んでいったといひます。

もしかしたらそれがキキだつたのかもしれないと、町の人々はうわさしておりました。

1 この物語を四つの場面に分けたとき、「場面2」と「場面4」はどこからになるか。それぞれ最初の五字を抜き出して答えなさい。(各1点)

2 場面1において、三回宙返りのスターだつたときのキキの心情を表す言葉を漢字二字で抜き出して答えなさい。(1点)

3 場面2ではキキと口口の対照的な考え方が描かれます。二人が最も大切だと考えているものをそれぞれ漢字一字〜二字で答えなさい。(各1点)

4 場面3でのおばあさんとの会話について次の各問いに答えなさい。

(1) 会話の中でのキキの心情の動きとして最も適切なものを次のア〜エから一つ選び、記号で

答えなさい。(2点)

ア 驚き ↓ 不安 ↓ 落ちこみ ↓ 決意

イ 不安 ↓ 決意 ↓ 驚き ↓ 落ちこみ

ウ 驚き ↓ 落ちこみ ↓ 決意 ↓ 不安

エ 落ちこみ ↓ 不安 ↓ 驚き ↓ 決意

(2) キキは、「たとえ死んでも四回宙返りに挑む」という決意をしますが、それは何を得的ためですか。文章中から五字で抜き出ささい。(2点)

5 場面4の「天に昇つてゆく白い魂のように見えました」という比喩表現は、キキのどんな運命を表していますか。「四回宙返り」という語を必ず使つて二十字以内で答えなさい。(2点)

6 物語の最後にサーカスの大テントに止まっていた「白い大きな鳥」は何を表していると考えられますか。
次のア～エから最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。(1点)

ア 四回宙返りに成功して、お客さんから盛大な拍手をもらったことを嬉しく思い、自分の最高の演技に満足しているキキ。

イ キキが四回宙返りを成功させたものの、命を落としてしまったことを期待外れだったとがっかりするおばあさん。

ウ 命を懸けた四回宙返りを成功させたものの、それと引き換えに人々の前から消えねばならない

「こと」を切なく思っているキキ。

エ これから先、キキと同じように危険な四回宙返りをする人が次々に現れるのではないかと

心配している町の人々。

7 もしもおばあさんに出会っていなかったら、キキは四回宙返りに挑んでいたでしょうか。それとも挑んでいなかったでしょうか。自分の考えを次の条件に従って書きなさい。(3点)

〈条件〉

① 二段落構成で書くこと。

② 一段落目では、キキが四回宙返りに挑んでいたか、挑んでいなかったかを一文で述べること。

(どちらでもない、分からない は禁止)

③ 二段落目では、そのように考えた理由を述べること。

五、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。〔思判表〕

〈文章A〉

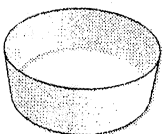
私たちは物を数える際、さまざまな数え方を使います。例えば犬を数える場合、それが大型なら「二頭」、小型なら「一匹」、そしてロボットなら「一台」のように数え分けます。現代の日本語には約五百種類の数え方があり、数える対象の特徴に応じてそれらを適切に使っています。

例えば、紙や板、せんべいやクッキーなどの平面的な物は「一枚」と数えますが、コインや衣服のボタンは「一枚」でも「一個」でも数えます。では、どれくらい平面的な物をなら「一枚」で数えられるのでしょうか。

① 食器を例に考えてみます。左の図の上にあるような平皿なら、誰もが「一枚の食器」と数えると思います。この皿がだんだん深くなるにつれて、「一個の食器」ともいえるように数え方が変化していきます。そして左の図の下のような食器になると、もう「一枚」では数えられません。このことから、私たちは食器の深さを手がかりにして、数え方を「一枚」にするか「一個」にするか判断の基準を設けているといえます。



1(枚/×個)



1(×枚/個)

皆さんも身近な人たちに数え方の②実験をしてみましよう。平面的な円盤の絵を日本語の話し手に見せ、どう数えるか聞きます。その際、円盤をどんどん重ねていき、その厚みを増していきます。すると、いくつ円盤を重ねたときに数え方が変わるのか、その境界線を探ることができるのです。

筆者が大学生三十人を対象に調べたところ、Aの円盤の図は

ほとんどの人が「一枚」と数えると答えました。ただ、なかには「一枚」でも「一個」でも数えると答えた人が二人いました。

その理由を聞くと、円盤の大きさによって数え方が変わるという意見が出ました。確かにこれがコインくらいの小さい物であれば「コイン一個」でも「コイン一枚」でも数えられます。物体のサイズまでは今回の実験では考慮していませんが、恐らく五百円玉よりも大きい物であれば「一枚」、それよりも小さい物であれば「一個」でも数えられるとするのが自然なのではないかと推測します。

円盤を重ねた図がBです。ここで早くも「一枚」とは数えないと答えた人が六人いました。厚みが二倍になっただけでも、「枚」では数えにくくなるようです。そしてCのように厚みが三倍、Dでは四倍になるとほぼ全ての人が「一枚」とは数えないという判断をしました。

この実験から、私たちにとって「枚」で数えられる物体はかなり薄くなければならないということ、そしてその厚さが倍になった時点で、答える人は「枚」で数えるのか「個」で数えるのか迷うのだということがわかりました。

1 文章Aにおいて問題提起にあたる一文を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。
(句読点を一字に含めます)(2点)

2 傍線①「食器を例に…」に対する結論では、何を数え方の判断基準にすると述べているか。五字で抜き出して答えなさい。(1点)

3 傍線②「実験」について次の各問いに答えなさい。

(1) 実験の中で筆者が考慮していなかった意見が出たが、それはどのような意見か。文章中から二二字で抜き出して答えなさい。(2点)

(2) 実験で考慮していないことがきっかけとなって筆者が推測したこととして適するものを次のA～Eから一つ選び、記号で答えなさい。(1点)

	「1枚」	どちらでも数える	「1個」
A	28人	2人	0人
B	10人	14人	6人
C	0人	1人	29人
D	0人	0人	30人

- ア 五百円玉よりも大きなものであれば多数の人が必ず「枚」という数え方をする。
イ 五百円玉を重ねることによって数え方が大きく変わるのとは自然である。
ウ 実験に円盤と五百円玉のどちらを使っても結果に影響はない。
エ 五百円玉よりも小さなものであれば「一個」でも数えられるのが自然である。

(3) この実験からわかったことを二つ抜き出して答えなさい。(両正答2点)

〈文章B〉(Aの続きです)

数え方「枚」の特徴がわかったところで、「枚」を使った【a】も調べてみましょう。容姿端麗の男性を「二枚目」といいますが、これは平面的な物と何か関係があるのでしょうか。実は、これは歌舞伎に由来する表現なのです。かつては、歌舞伎の小屋の看板一枚一枚に出演者の名前を書いて掲げていました。その際、右側に掲げられる人が上位で、看板の二枚目に記される役者は色男、三枚目にはおどけ役の人の名が記される習慣がありました。そのため、現在でも顔が整っている俳優を「二枚目俳優」、そして笑いを誘う演技をする役の俳優を「三枚目俳優」というのです。

その他にも、「一枚かむ」といえば、仕事やたくらみに一役買う、関係をもつことです。「枚挙にいとまがない」の「枚挙」は、何かを一つ一つ数えあげるという意味。「枚」の字は薄く削った木片を表していて、古く「枚」という数え方は、「一個」の「個」と同様、人や物の全般を数えるのにも使われていました。「いとま」は、時間のゆとりですので、「枚挙にいとまがない」とは、物がたくさんありすぎて数えるゆとりすらい、つまり多数であることを表します。

4 文章Bの空欄【a】に当てはまる言葉を漢字三字で答えなさい。文章Bの内容をヒントに考えること。
抜き出し問題ではありません。(2点)

六、次の文章は、「亜未」「純平」「真一」「穂夏」の四人が「もしも教室に、好きな家電を一つだけ置けるなら何がいいか」というテーマでグループディスカッションをしている様子です。文章を読んで、あとの問いに答えなさい。【思判表】

亜未 もしも教室に一つだけ家電を置くことができるなら何がいいかな？

真一 なかなかむずかしいテーマだね…。

純平 そんなにむずかしいテーマかな。

真一 家電にもいろいろあるからね。

穂夏 **A** せっかくなら教室に置けるんだから、クラスみんなが平等に使えるものがいいね。

亜未 そうだね！ その方向性で意見を出していこう！

穂夏 ありがとう。①じゃあ…電子レンジなんてどうかな。

純平 ②どうして？

穂夏 電子レンジがあれば、お弁当を温められるじゃない？みんなも温かいごはんを食べられるほうがうれしいかなと思って。

純平 でも一台しか置けないし、お昼の時間に行列ができちゃうよ。電気代もかなりかかりそうだし…。電子レンジはなし！

亜未 ③真一さんはどう？何か意見はある？

真一 いい意見か自信はないけど…、すでに設置してあるものをさらにもう一台置くのはどうかな。

穂夏 ④それって、どういうこと？

真一 うん。たとえば…エアコン！ エアコンが二台になれば、教室があつという間に涼しくなるし、たくさんの人に風があたるようになるよ。

亜未 なるほどね。そういうパターンもありだね。

穂夏 **B** いいじゃん！ とてもいい考えだと思うよ！

純平 うーん…でも、すでにあるものを置くのはなんだかもつたいない気がするなあ。

亜未 ……掃除機がいいんじゃないかな。掃除当番で交代制にすれば、みんなで使えるし、掃除も効率的に進められるようになるよ！

真一 **C** おお！ 掃除用具入れにもちようど収まりそうだし、きっと電気代もそんなにかからないね。

穂夏 それ、とつてもいいと思う！

純平 じゃあ掃除機に決まりだね。

1 傍線①～④は、授業で学習した「話し合いのこつ」のどれに当たるか。それぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。(各1点)

ア 促し イ 質問 ウ 確認 エ 提案

2 この話し合いの中には、「話し合いのこつ」以外にも、話し合いをつなげたり、円滑に進めたりするうえで有効な発言がいくつかあります。傍線A～Cのいずれか一つを選択し、選んだ記号とその有効な点を答えなさい。(3点)

3 この話し合いの観察者として、もしも純平さんを中心に見ていたとしたら、話し合い終了後にあなたは純平さんどのような反省点を伝えるべきですか。純平さんに伝えるように答えなさい。(3点)